

鷗外・歴史小説への軌跡

Ogai : Toward His Historical Novels

前田 久徳

Hisanori MAEDA

1

鷗外の歴史小説は、「興津弥五右衛門の遺書」(大1・10)を以て開始される。この作品は乃木希典の殉死事件(大1・9)に触発されて成ったというのが定説で、そのこと自体を疑うつもりはないが、既にそれ以前に鷗外の内部で、歴史小説へ向かう精神的土壌は用意されていたのであって、その意味で、乃木の殉死は、一つの契機に過ぎなかったと思う。その辺の事情を確認して、この作家が歴史小説の世界へ進んで行った道程を素描することが、本稿の目的である。

まず、三つの作品の引用から始める。いずれも明治四十三、四年に書かれた作品である。

《一体日本人は生きるということを知つてゐるだらうか。小学校の門を潜つてからといふものは、一しう懸命に此学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思ふのである。学校といふものを離れて職業にあり附くと、その職業を為し遂げてしまはうとする。その先には生活があると思ふのである。》

そしてその先には生活はないのである。

現在(現在)は過去と未来との間に画した一線である。此線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。》(青年・明43・344・8)

《花房学士は何かしたいこと若くはする筈の事があつて、それをせずに姑く病人を見てゐるといふ心持ちである。それだから、同じ病人を見ても、平凡な病だと詰まらなく思ふ。Intesauの病症でなくては厭き足らなく思ふ。又偶々所謂興味ある病症を見ても、それを研究して置いて、業績として公にしようと思ふが、それはなかつた。勿論発見も発明も出来るならしようと思ふが、それを生活の目的だとは思はない。始終何か更にしたい事、する筈の事があるやうに思つてゐる。併しそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。或時は何物かが幻影の如くに浮かんでゐる時もある。種々の栄華の夢になつてゐる時もある。それかと思ふと、其頃碧巖を見たり無門関を見たりしてゐたので、禅定めいたcontemplativeな観念になつてゐる時もある。兎に角

取留めのないものであつた。》（カズイスチカ・明44・2）

《生まれてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られてゐるやうに學問といふことに齷齪してゐる。これは自分に或る働きが出来るやうに、自分を為上げるのだと思つてゐる。其目的は幾分か達せられるかも知れない。併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。策うたれ駆られてばかりゐる為めに、その何物かが醒覺する暇がないやうに感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生といふのが、皆その役である。赤く黒く塗られてゐる顔をいつか洗つて、一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が眞の生ではあるまいかと思はれる。併しその或る物は目を醒まさう醒まさうと思ひながら、又してはうとうとして眠つてしまふ。》（妄想・明44・3・4）

《生きるといふこと》、《生活》、《更にしたい事、する筈の事》、《眞の生》と、使用されている言葉は様々だが、ここに共通して見られるのは、充実感に満たされて現在只今を生きているという生の実感への渴望であり、翻つて、《眞の生》から懸隔して、齷齪と日々を生きるなかで、充実した生の実感を手に出來ぬ現在のありやうへの不満である。「青年」では、《過去と未来との間に画した一線である》現在に《生活がなくては、生活はどこにもない》と言ひ、《生きるといふこと》は、現在只今を生じる充実感を以て生活する

ことに外ならないとの思いを語る。「カズイスチカ」の花房学士は、自分にとって《したい事、する筈の事》があると意識しながらも、それが何物であるかをしかと捕捉できないまま、《遠い向うに或物を望んで、目の前の事を好い加減に済ませて行く》。だから彼は、《詰まらない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐる》父に及ばないことを強く感じ、父のありやうに《有道者の面目》をすら見る。舞台監督の鞭を背中に受けながら役から役をひたすら齷齪と勤めて来た「妄想」の主人公も、《背後にある》《眞の生》を夢想する。現在只今を充実感に満たされて生きようとする《眞の生》への希求が、この時期の鷗外に噴出して来た直接原因をこの小論で性急に特定しようとは思わないが、軍医にして文学者、近代化の推進者にして、その批判者という常に二面性を持つて来た、あるいは二面性を持つことを強いられて来た鷗外のありやうと関連しているのは事実だろうし、この《眞の生》への思いは、遠く《宮内省陸軍省ノ栄典》を強く謝絶し、《石見人森林太郎トシテ死セント欲ス云々》という遺書の有名な一節とも呼応しているはずで、そうだとすれば、生の燃焼感への翹望がこの作家の深い場所から発せられた切実な思いであつただけは、間違ひのないところであらう。

2

しかし、上の如き《眞の生》への渴望とは裏腹に、現実を生きる鷗外は、それとはほど遠い場所に身を置かざるを得ない。一つの系に自己を封じ込めた完結的な生がもたらす充実感とは無縁な態度を取るのである。

例えば、「かのやうに」（明45・1）。所謂秀磨物の第一作目であるこの作品の背景には、大逆事件と南北朝正閏論争という状況が

あったことはよく知られているとおりで、明治四十四年の一月には、幸徳秋水ら十二名に死刑の判決が下り、これに踵を接するよう南北朝正閏論問題がジャーナリズムを賑わした。さらに遡れば、明治二十五年に久米邦武が論文「神道は祭天の古俗」がもとで帝国大学教授の地位を追われる事件もあった。こうした時代の思想状況と学問的真実との問題を、洋行帰りの歴史学者、五条秀磨を主人公として、彼の考えを通して展開しようとする。

真の歴史学のためには、神話と歴史との峻別から始めねばならないが、時代の状況ではそれが難しく、〈危険思想〉となる恐れがある。そこで秀磨は、ファイヒンガーの「へかのように」(Als Ob)の哲学に拠ろうとして、その立場を友人の綾小路に以下のように説明してみせる。

《神が事実でない。義務が事実でない。これはどうしても今日になつて認めずにはゐられないが、それを認めたのを手柄にして、神を潰す。義務を蹂躪する。そこに危険は始めて生じる。行為は勿論、思想まで、さう云ふ危険な事は十分撲滅しようとするが好い。併しそんな奴の出来たのを見て、天国を信じる昔に戻さう、地球が動かさずにゐて、太陽が巡回してゐると思ふ昔に戻さうとしたつて、それは不可能だ。さうするには大学も何も潰してしまつて、世間をくら闇にしなくてはならない。黔首を愚にしなくてはならない。それは不可能だ。どうしても、かのやうにを尊敬する、僕の立場より外に、立場はない。》

秀磨の立場は、時代状況と学問的真実との妥協を探った折衷案であるのは明らかである。秀磨の妥協的思弁は、同時に彼に仮託して展開した鷗外の思弁の態度でもあったわけで、へ小生ノ一長者ニ対スル心理状態が根調トナリ居リソコニ多少ノ性命ハ有之候者

ト信ジテ書キタル次第》(大7・12、山田珠樹宛書簡)との言葉が示すとおり、山県有朋か、或いは乃木希典を指すと思われる「一長者」を念頭に置いて、現実的対応を探るといふ発想自体に、既に折衷案への方向が決定していたと言える。

もちろん、このような対処は、所詮本質との対峙を避けたものであることを鷗外自身もよく承知していたはずで、現に、綾小路に「へ八方塞がりになったら、突貫していく気で、なぜ遣らない」と言わせるし、へうかと神話が歴史ではないと云ふことを言明しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るやうに物質的思想が這入つて来て、船を沈没せずには置かない……(略)……さう思つて知らず識らず、頑迷な人物や、仮面を被つた思想家と同じ穴に陥いつてゐる父子爵との妥協を希望する秀磨の態度を否定させて、作品が終わっているのである。

問題は、このような思弁が、鷗外にもたらす或る種の空虚さである。秀磨の説く「へかのやうに」の立場を、鷗外は綾小路に以下のように批判させる。

《百姓はシの字を書いた三角の物を額へ当て、先祖の幽霊が盆にのこゝ歩いて来ると思つてゐる。道学先生は義務の発電所のやうなものが、天の上のどこかにあつて、自分の教はつた師匠がその電気を取り続いで、自分に掛けてくれて、そのお蔭で自分が生涯びりびりと動いてゐるやうに思つてゐる。みんな手応のあるものを向こうに見てゐるから、崇拜も出来れば、遵法も出来るのだ。人に僕のかいた裸体画を一枚遣つて、女房を持たずにゐるけしからん所へ往かずにはゐる、これを生きた女であるかのやうに思へと云つたつて、聴くものか、君のかのやうにはそれだ。》

たとえ、頑迷固陋な考えであっても、〈手応のあるものを向こうに見てゐる〉限り、〈崇拜も出来れば、遵法も出来る〉。崇拜や遵法のためには、〈手応のあるもの〉を実感として手にしていなければならぬ。しかし、〈かのやうに〉の立場に〈手応のあるもの〉の実感がないとすれば、心の空虚さは避けられない。「かのやうに」で示す鷗外の姿勢は、自己の信じる系の中に自分を託して自己完結的な充実した生を生きるというのとは無縁の態度で、へ生きるといふこと（カズイヌチカ）〈眞の生〉（妄想）からは、遠く離れている。続く秀磨物の第二、三作の「屹逆」（明45・5）「藤棚」（明45・6）でも、「かのやうに」との関連問題として、前者ではこの覚めた時代にあつて、どこに〈人生の秩序〉の基礎を築くかという、オイケンの問題設定を取り上げ、後者では、社会の秩序が、自由や解放、人間の欲望の力との関連で話題にされるが、作家の深部からの主張ではなく、軽い思索と言うに留まり、ことに前者では、オイケンの〈新しい連結〉と呼ぶ普遍宗教についての綾小路と秀磨の遣り取りが、芸者の屹逆によって揶揄的に相対化されてさえている。ところが、一連の秀磨物で、上述の如き態度を示した鷗外が、「羽鳥千尋」（大1・8）を書く。「藤棚」から二ヶ月後、「かのやうに」から七ヶ月後のことである。無名の一青年の死に触発されて書かれたこの作品は、虚構性を排除し、事実を淡々と記したのみの短いものというせいもあつて、つい見過ごされてしまふような作品だが、そこで描かれる生のかたちが、上で見た「かのやうに」以下一連の作品で示されたそれとは対蹠的で、すぐ続けて開始される鷗外の歴史小説、「興津弥五右衛門」や「阿部一族」へ直結する位置にある。その意味で、歴史小説で展開される世界の実質的な幕開けを告げた無視できぬ作品である。

この作品は、羽鳥の経歴を簡略に記した後、鷗外が実際受け取った書簡をそのまま（とは言え、文章を整えるため鷗外の手が入っ

ているが）提出したものである。——羽鳥千尋なる人物は、貧と病の中、独学で医術開業試験の前期試験に及第し、一年ばかり独学して、後期学説試験に及第した。後期実地試験を受ける準備で、診察や治療の実際を見るために、東京に出ねばならない。そこで、勤め口の世話を鷗外に依頼する。鷗外は彼に勤め口を世話して遣るが、後期実施試験を受ける前に、病で亡くなった。以上の簡略な経歴を前置きにして、就職依頼のため羽鳥が鷗外に寄越した自己の経歴を述べた以下の内容の書簡が続く。小学校より、主席で通してきた羽鳥が、中学卒業後間もなく、近親のものが財産差し押さへの処分を受けたため、東京から群馬の実家に呼び戻され、剩え、病氣にかかる。貧と病のため、兼ねて大学へ入ろうという志を翻して、開業医への道を選ぶ。糊口の道を確保したら、その上でいくらかでも学問が出来ると考えたのである。そこで、半年ばかり独学をして、医術開業試験の前期試験に及第し、また一年ばかり独学して、後期学説試験に及第した。後期実地試験を受ける準備で、診察や治療の実際を見るために、東京に出たい。そこで、勤め口の世話を鷗外に依頼したい。以上が書簡の内容である。

この作品について、小堀桂一郎は以下のような解説をしている。

《彼にこれを書かせた動機は、へ世間になんと云ふ不幸な人の多いことだらう》といふ、はしがき部分の一句が言ひつくしてゐる、まじりけのない同情と哀悼の心である。かうした形で不幸な青年の遺志を世に顕し、以ていく分なりともその霊を慰めてやりたいといふ暖かい心である。》⁽¹⁾

確かに、作品には不幸な青年に対するへまじりけのない同情と哀悼の心⁽²⁾が充溢している。が、同時にそこには、羽鳥の生き様への鷗外の強い思いがあつたはずである。無名の未知の青年の手

紙を受けて、彼の希望を入れ、へ一晚自宅に泊め、翌朝電車に乗る世話までして役所に遣り、その死に臨んで、今また彼のことをこうして書き留めたとすると、この青年への鷗外の思ひは、通り一遍ではない。

羽鳥の書簡に現れるのは、貧と病の中で、自ら定めた方向を必死で歩もうとする生のかたちであり、己の信じたものに向かって、今を激しく生き、生を燃焼させるといふ生のかたちである。それは、確実にへ手応のあるものを向こうに見てゐる(かのやうに)生のあり方である。へ舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる(妄想)生ではない。へ過去と未来との間に画した一線の(現在)(青年)を必死に生き、志半ばで倒れたゆえに、却って、その生の軌跡は鮮烈である。

「かのように」でファイヒンガーの哲学を述べる秀磨を書いた鷗外に、羽鳥の生き様、死に様が感動を与えなかったはずがない。羽鳥の死を受けて、彼のことを、虚構を交えず、ありのままに書いたということ自体、そのような生への感動を証拠立てている。そして、ここで描かれた、己の信じたものに向かつて、今を激しく生き、生を燃焼させるといふあり方は、次作「興津弥五右衛門の遺書」へそのまま直結する。それは単に、「興津弥五右衛門の遺書」のみでなく、鷗外の歴史小説の最初の単行本『意地』に収められた作品の人物達が見せる生き様と重なって行くのである。

3

「興津弥五右衛門の遺書」(大1・10)は、通説どおり、乃木希典の殉死(大1・9)に触発されて成ったことは間違いないが、問題は、乃木の殉死が鷗外の内部に如何なる感動を呼んだかにある。このことを考えるためにも、先ず作品世界の確認が必要であ

る。

この作品は、タイトルが示すとおり、山城船岡山の西麓の草庵で桑門同様の身の興津弥五右衛門が切腹するに臨んで、唐突の謗りや誤解を避けるために、ことの次第を書いたという遺書の体裁を取る。主命によって長崎へ出向き、たまたま渡来した伽羅の大木の本木と末木を巡って、仙台伊達家の役人と互いに値を競り上げて争ったことから、相役と口論になり、ついに彼を討ち果たすことになってしまふ。首尾良く香木を入手し、帰国した後、主君にことの顛末を告げ、切腹を願ひ出るが、助命される。その後、秘かに切腹の機を窺っていたが、その機を得ず、漸く主君の十三回忌に当たって、孤独のうちに殉死をするというのが、その内容である。

ところで、遺書の中心をなす相役との口論の内容は、次の通りである。

《其時相役申候は、仮令主命なりとも、香木は無用の翫物に有之、過分の大金を擲候事は不可然、所詮本木を伊達家に譲り、末木を買ひ求めたき由申候。某申候は、某は左様には存じ不申、主君の申し附けられ候は、珍しき品を買ひ求め参れとの事なるに、此度渡来候品の中に、第一の珍物は彼伽羅に有之、其本に本末あれば、本木の方が、尤物中の尤物たること勿論なり、それを手に入れてこそ主命を果すに当るべけれ、伊達家の伊達を増長為致、本木を譲り候ては、細川家の流れを瀆す事と相成可と申候。相役嘲笑ひて、それは力瘤の入れ処が相違せり、一国一城を取るか遣るか申す場合ならば、飽く迄伊達家に楯を衝くが宜しかるべし、高が四畳半の炉にくべらるる木の切れならずや、それに大金を棄てんこと存じも不寄、主君御自身にてせり合はれ候はば、臣下として諫め止め可申儀なり、仮令主君

が強ひて本木を手に入れたく思召されんとも、それを遂げさせ申すこと阿諛便佞の所為なるべしと申候。当時未だ三十歳に相成らざる某、此詞を聞きて立腹致候へ共、尚忍んで申候は、それは奈何にも賢人らしき申條なり、乍去某は只主命と申物が大切なるにて、主君あの城を落とせと被仰候は、鉄壁なりとも乗取り可申、あの首を取れと被仰候は、鬼神なりとも討果たし可申と同じく、珍しき品を求め参れと被仰候へば、此上なき名物を求めん所存なり、主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入候批判がましき儀は無用なりと申候。相役愈々嘲笑ひて、お手前とても其の通り、道に悖りたる事はせぬと申さるゝにやあらずや、これが武具杯ならば、大金に代ふとも惜しからじ、香木に不相応なる価を出さんとせらるるは、若輩の心得違なりと申候。》

ここで、近代の感覚からすれば情理を尽くした正論に見える相役の主張に対して、弥五右衛門が繰り返し主張しているのは、主命と申物が大切、主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入候批判がましき儀は無用とする立場であり、彼の行動原理は、無条件に絶対化された主命に置かれている。

典拠の「翁草」では、弥五右衛門と相役とが口論したとばかりで、以下のように簡略に記されるのみで、上の如き内容は記されていない。

《一と年興津弥五右衛門と云士に、相役一人添て差越さるゝ処に、異なる伽羅の大木渡れり、本木と末木と二つあり、其の頃松平陸奥の上正宗よりも、唐物を調ん為、役人下り居しが、彼伽羅の本末をせり合ひて、三斎の役人と互に直段を付上るゝ興津が相役是を気毒に思ひ、斯ては直段夥しく高直になれば、所

詮同木の事なれば、末木の方にせんと云、興津は是非本木を調んと云募りて、口論に成り彼の相役を打果し、終に本木の方を調て、隅本に帰り、右の段々を申し達切腹を願ふ、……》

したがって、先に引用した口論の続きとして記された以下の部分、

《茶儀は無用の虚礼なりと申さば、国家の大札、先祖の祭祀も、総て虚礼なるべし、我等此の度仰せを受けたるは茶事に御用に立つべき珍しき品を求むる外他事なし》

へ注目して、乃木大将の殉死をば功利主義的立場から批判することに対する反駁の意を寓したとする見方がある。確かに、この点にのみ注目すれば、そのような解釈が成立する。しかし、上で見たように、弥五右衛門の論理は、必ずしも相役の「功利主義的立場」と正確に見合うものではない。彼の立脚点は、反功利主義の論理ではなく、「主命大事」という一点であり、彼の一貫して示す姿勢は、主命をアプリアリなものとして無条件に信じ、そこへ自己を封じ込めて疑うことを知らない。現に、先の引用の後に、

「これが主命なれば、身命に懸けて果たさでは相成らず」との言葉がすぐ続いているのである。

功利的立場への反駁という意味でなら、弥五右衛門の報告に対する主君の「假令香木は貴からずとも、此方が求め参れと申附けたる珍品に相違なければ、大切と心得候事当然なり、総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物はなくなるべし」との言葉こそがそれに当たる。しかし、言うまでもなく、作品で対立関係を形成するのは弥五右衛門と相役であって、主君と相役の対立ではない。作品を貫く筋道は、主命大事という「手応のある物を

向こうに見て(かのやうに、それを行動原理に動く弥五右衛門のありようであり、主君の十三回忌に一人孤独に腹を切る彼の純粹に自己完結的な生のかたちである。桑門同様の孤独な身となり、形ばかりなる草庵で窓の雪明かりを頼りに、皺腹を掻き切るという完全に無償の行為として描かれるところに、弥五右衛門のその生き様が、鮮烈に浮かび上がるのである。

この作品を以上のように見るとき、鷗外の執筆意識を刺戟した乃木の殉死に、彼が何を見ていたかは明らかである。弥五右衛門を通して描いて見せた生のありようを乃木に見たのである。殉死が、近代人の精神から懸け離れた甚だしいアナクロニズムであるゆえに、乃木の事件は、己の信じる系に自身を封じ込めて、迷わぬ完結的な生を際立たせ、それが、鷗外の眼前に、どう動かしようも、否定しようもない事実として出現していることへの感動だったはずである。この感動は、羽鳥千尋に鷗外が見たものと同質である。先に、「羽鳥千尋」によつて、既に、鷗外の歴史小説へ向かつて行く方向が準備されていた、と言つておいた所以である。

しかし、生のありようは同質とは言え、乃木の場合は羽鳥の場合と違って、殉死というアナクロニスティックな行為の中に出現する。乃木の事件に見出した感動を、弥五右衛門の遺書に仮託して語ったのは、乃木の事件の生々しさを避けるために、歴史の仮装を纏わざるを得なかったという事情以外に、より本質的には、乃木の事件が内包する時代錯誤性を不問に付すためには、過去の歴史的事象に仮託せざるを得ない。殉死という行為自体へ理性的な照射が加われれば、乃木に見出した生のかたちが、後退し色褪せることが避けられないからである。ここに、鷗外の歴史小説における「歴史」の意味の重要な側面が浮かび上がる。過去の事件として、それが「あった」という事実性を粹にすることで、そのこと自体への近代の理性からの価値判断を防ぐのである。新たな

資料の発見で、事件の細部への手直しが行われたり、場合によれば、大幅な改訂が加えられることになるのは、この作家の考証癖のせいばかりではない。事件の枠を保証する確固たる事実性を獲得しようとする鷗外の志向性の現れに外ならない。外ならぬ「興津弥五右衛門の遺書」が、その後の資料の追加によつて、大きな改訂が加えられた。初稿の孤独のうちの弥五右衛門の殉死が、改稿では、公に認められた晴れがましきの中で行われることになり、作品の表面的様相は一変する。これにより、初稿における弥五右衛門の殉死の無償性が薄められたのは事実だが、上で見たような彼の生のありよう自体は些かも変化していないことを、念のため付言しておく。

ところで、「歴史」への近代の側からの理性的価値判断なり、批判なりを抑えて、それを作品世界の絶対的な枠として使用していくとき、鷗外は時代との接点を切り捨てて行ったことをも意味する。「かのやうに」では、秀磨の姿勢がたとえ妥協的なものであれ、己の生きる時代が意識されていた。それを無視できぬからこそ、秀磨の態度は妥協的でしかあり得なかったのである。しかし、歴史小説を書き継ぐ鷗外は、同時代へのアクチャリティを捨象して行ったというのが、私の理解だが、今はそのことに深入りしない。

4

「阿部一族」(大2・1)も、上述の脈絡で理解されるべき作品で、作品の主題を殉死の否定的な面を描いたとする理解には問題がある。確かに、殉死の引き起こした悲劇がストーリーの縦糸を形づくっているのは間違いないが、それに纏わる多くの人物の逸話を全て、殉死の否定的側面という見方で律しおすることは不可能だからである。

「興津弥五右衛門の遺書」は、殉死を肯定的に描いたのに対し、「阿部一族」は、殉死の否定的な面を描いたとか、^①絶対権力と個我的対立相剋^②を描いたものとする見方に従うと、例えば、竹内数馬の乙名島徳右衛門や高見権右衛門の小姓の主殉じる無償の行為が、作品から浮いてしまうことになるし、また、かなりの分量で述べられる柄本又七郎の挿話が、作品の中でのいかにも据わりが悪いことになる。

阿部の隣家に住まいする又七郎は、阿部家と昵懇で、弥一右衛門に殉死の許しが出ないと聞いたときから、気の毒がり、その後の阿部家の成り行きに同情し、親身のもの以上の心痛をする。お上のお咎めを覚悟の上で、権兵衛達が閉じこもった屋敷へ女房を見舞いに使わしめる。しかし、一方で、討手でないのに、阿部の屋敷に入り込んで手出しをすることは厳禁との沙汰が出ているのを無視して、

《武士たるものが此の場合に懷手をして見ていられたものでは無い。情は情、義は義である。》

と言って、私に討手に加わり、昵懇の弥五兵衛に深手を負わせ、自らも突然飛び出て来た七之丞の槍に太股を衝かれる。この又七郎の働きに対して、家老職から使者を遣って誉め言葉を伝えるし、又七郎は元龜天正の頃は、城攻め野合わせが朝夕の飯同様であった。阿部一族討ち取りなぞは茶の子の茶の子の朝茶じや^③と言いつつ。しかも、作品の最後が次のように結ばれるとき、情に流されず、義によって行動した又七郎の面目が浮かび上がって作品世界が閉じられることになる。

《阿部一族の死骸は井出の口に引き出して、吟味せられた。白

川で一人一人の傷を洗って見た時、柄本又七郎の槍に胸板を衝き抜かれた弥五兵衛の傷は、誰の受けた傷よりも立派であったので、又七郎はいよいよ面目を施した。》

尤も、又七郎に関することは全て、典拠の「阿部茶事談」に記載されたことではある。しかし、「阿部茶事談」は人物中心主義で、各人物ごとに纏められて叙述がなされるので、又七郎に関するこれらの話の後に、「高見権右衛門の働き、下知の事阿部兄弟残らず討ち捕らえ、人数引き上げの事」という部分に移り、さらに高見権右衛門の話に続いて行く。それを「阿部一族」では、「阿部茶事談」に沿いながらも、部分的に時間軸に従って並び替えているので、勢い又七郎の行為が強調された形で作品が終わったと言う事情もある。しかし、このことに鷗外が気付かぬ筈がないから、殉死の否定面を書くことに焦点があったのなら、何らかの処置をしたはずで、又七郎の賞揚で世界を閉じるはずがない。

このことは逆に、又七郎の「情は情、義は義」という「武士たるもの」の信念、謂わば自らの内に内在化された倫理に従い、何の迷いもなくそこに自己を封じ込めた生のかたち、作品の主題と鷗外の感動の焦点があったことを物語る。殉死の許可があったか否かと別、あるいは、殉死の肯定面が描かれているか、否定面が描かれているかということとは別に、殉死を契機として現れる、登場人物達の生き様・死に様が、又七郎のそれと重なっていくからである。描かれるのは殉死の肯定、否定のいずれにしろ、そこには死を前にした人間達の共通の生き様・死に様^④己の信じる系に自己を封じ込めて疑わない、その意味で、意識の分裂を知らぬ自己統一的な生のありようが語られるからである。

以下、各人物について、その点を簡単に見ておく。

まず、内藤長十郎。忠利に執拗に殉死を願って漸く聞き届けら

れたこの人物の心理を、作者は「細かに此男の心中に立ち入つて、分析してみせる。」

《自分の発意で殉死しなくてはならぬ云ふ心持ちの旁、人が自分を殉死する筈ののだと思つてゐるに違ひないから、自分は殉死を余儀なくせられてゐると、人にすがつて死の方向へ進んで行くやうな心持ちが、殆んど同じ強さに存在してゐた。反面から云ふと、若し自分が殉死せずにゐたら、恐ろしい屈辱を受けるに違ひない」と心配してゐたのである。》

《若し自分が殉死せずにゐたら、恐ろしい屈辱を受けるに違ひない》との部分が、後の阿部弥一右衛門の悲劇の伏線として用意されているのは明らかだが、この部分や《自分は殉死を余儀なくせられてゐると、人にすがつて死の方向へ進んで行くやうな心持ち》に拘つて、殉死の否定的側面をあげつらう必要はない。もし、作者にそれを描く意図があつたのなら、当然描かれてしかるべき、《自分は殉死を余儀なくせられてゐると、人にすがつて死の方向へ進んで行くやうな心持ち》と《自分の発意で殉死しなくてはならぬ云ふ心持ち》との葛藤が長十郎にないからである。その葛藤が長十郎の内部で演じられることなく、叙述は、《死を怖れる念は微塵も無く》、《殿様に殉死を許して戴かうと云ふ願望は、何物の障碍をも被らずに此男の意志の全幅を領していた》点に移り、漸く許しを得た彼の《死を怖れる念は微塵も無い》心静かな状態を、殉死当日の、家族との会食を済ませ、好きな酒に酔い、居間で軒をかきながら寝入つてしまふ姿に、以下の叙述を重ねて描いて行く。

《家はひっそりとしてゐる。丁度主人の決心を母と妻とが言は

ずに知つてゐたやうに、家来も女中も知つてゐたので、勝手からも厩の方からも笑聲などは聞こえない。

母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、ちつと物と思つてゐる。主人は居間で軒をかいて寝てゐる。開け放つてある居間の窓には、したに風鈴を附けた吊窓が吊つてある。その風鈴が折々思ひ出したやうに微かに鳴る。その下には丈の高い石の頂きに掘り窪めた手水鉢がある。その上に伏せてある捲物の柄杓に、やんまが一正止まつて、羽を山形に垂れて動かずにゐる。》

死を前に一点の乱れもない澄明な心境の中で、心安らかに軒をかく長十郎の姿に、ひっそり静まり返つた家の様子や、吊窓の風鈴の微かな音や、柄杓に止まつたやんまの描写を重ねて、醸し出される静謐感は無類である。長十郎の内部風景と彼を取り巻く外部風景が一体化して、殆ど象徴の域に達していると言つてよい。長十郎に関する部分は、介錯を依頼しておいた関小平次が来たのをしおに、彼は《心静かに支度をして、関を連れて菩提所東光院へ腹を切りに往つた》との叙述で閉じる。ここに浮かび上がつて来るのは、死へ向かう行為へ完全に自己を封じ込めて乱れぬ人間の心静かなありようである。この長十郎の内発的な行為が、五助との対比で、より鮮明化される。五助の殉死は、作中唯一、対他的な意識に浸潤されたものとして、描かれているからである。彼は、《お鷹匠衆はどうなされましたな、お犬牽は只今参りますぞ》と声高に言い放ち、《一声快よげに笑つて、腹を十字に切つた》のである。また、彼を送り出した女房の《お前も男じや、お歴々の衆に負けぬ様におしなされい》との言葉にも、他者の目を強く意識していることが明らかである。

では、逆に、殉死を許されなかった阿部弥一右衛門の場合はどう

うか。

《己は命が惜しくて生きてゐるのでは無い、己をどれ程悪く思ふ人でも、命を惜しむ男だとはまさかに云ふことが出来まい、たつた今でも死んで好いのなら死んで見せると思ふので、昂然と項を反らして詰め所へ出て、昂然と項を反らして詰め所から引いてゐた。》

その彼が、〈命を惜しむ男〉と見られたとき、憤然として腹を切る。彼は、殉死を許され、死後の保証も得た者達と違つて、ただ、武士としての体面を己の命と引き替えに守つた。それは、〈情は情、義は義〉という〈武士たるもの〉の信念を貫いた柄本又七郎の行爲と、見かけは離れていても、その本質に於いて同質である。〈武士たるもの〉としての内在化された倫理に従い、そこに自己を封じ込めた生のかたちを示すからである。

同じことが、竹内数馬についても言える。阿部家討ち入りの役目が、大目付の林外記の進言だと聞くと、即時に討ち死にを決意する。殉死をしなかつたから命がけの場所に遣うという外記の意を悟つたからである。

《同じやうに勤めてゐた御近習の若侍の中に殉死の沙汰が無いので、自分もながらへてゐた。殉死して好い事なら、自分は誰よりも先にする。それ程の事は誰の目にも見えてゐるやうに思つてゐた。それを疾うにする筈の殉死をせずにゐた人間として極印を打たれたのは、かへすぐも口惜しい。自分は雪ぐことの出来ぬ汚れを身に受けた。》

数馬の行動原理は、阿部弥一右衛門のそれと正確に重なつてい

るのは明らかである。こうして彼は、〈死んで雪がれる汚れではないが、死にたい。大死にでも好いから、死にたい〉との思いで、一直線に死へ向かつて行く。武士としての体面の意識が内在化された倫理になつてゐる彼等にあつては、その一点で迷わず死に突き進む。それは対外的には何一つ報われることのない無償の行爲ゆえに、かえつて、その生き様、死に様が鮮烈に浮かび上がる。無償の行爲と言うなら、数馬の乙名島徳右衛門や高見権右衛門の小姓もそうある。

〈乙名島徳右衛門が事情を察して、主人と同じ決心をし、討ち入りで主に殉じて死ぬ。また、同役殺害で切腹しようとしたとき、主人に命を助けて貰つた時から、権右衛門に命を捧げて奉公してゐた〉小姓は、鉄砲の弾を我が身に受けて、権右衛門を救う。

こうして、「阿部一族」が描く人物達が示すのは、殉死であれ、屈辱に対する憤死であれ、あるいは、武士としての〈義〉であれ、それぞれの内在化された倫理に従つて、一切の迷ひなしに生き抜いた姿である。それが死を契機に鮮烈に出現するドラマである。

鷗外が、典拠とした「阿部茶事談」に見出したものは、このような武士達の生き様、死に様に現れた生の姿だつたはずである。このことは、鷗外の資料の扱い方からも言えるが、それについては別の機会に譲る。

5

「かのやうに」「阿部一族」で、自ら信じる系に己を封じ込めて分裂を知らぬ生のありようを描いて見せた鷗外は、同じ延長線上に成つた歴史小説三作目の「佐橋甚五郎」（大2・4）の後、「鎚一下」（大2・7）を書いて、秀磨物の最後を締め括る。

しかし、そこに現れる世界は、もはや「かのやうに」で描かれ

たような折衷案に腐心する秀磨の姿ではなく、歴史小説で描いて見せた人物達とその生のありようを一にする人物、H君へ率直な賛嘆を示す秀磨の姿なのである。

作品は、新橋駅へ人を見送りに行った秀磨の体験を叙した形になっている。

まず、「高貴な方を見送りに行った際、暇乞いを述べようとして、護衛の者に押し止められ、憤慨した体験と、「顕要の地位に居る人」を見送った際、その人が「己を浮かばせたり己を沈ませたりすることは出来る」地位にいる人間で、「其人に睨まれたくないと云ふ情は、慥に己の心のどこかにひそんでゐる」ことを認め、不快感に襲われる体験を語り、これと対比する形で、「己のために意義のある出来事」として、Hを送った話が語られる。Hは、多くの不遇の青年を諸方から集めて、山口県の秋吉で大理石の採掘をしている。彼はキリスト教の精神を以て、これらの青年を同胞として遇し、自分も一緒になって労働しているのである。その青年の中の一人、Aがあることから癩癩を起こし、出刃包丁でHに切りかかったことがある。その時、包丁がHに当たらず、Hの細君の腕に当たった。細君は死を決して賛美歌を誦した。Aは驚き、自殺を図ったが周りの者に止められ、以後、Hの同胞のようになって、現にある慈善事業に尽瘁している。秀磨はこの話を聞いて、「ひどく感動した」ことを叙し、続けて次のように言う。

《併しおもに己を感動させたのは、其事ではなくて其人である。己の男爵に聞いた物語めいた事実は、譬へば断えず流れてゐる水が偶々石に激せられて沫を飛ばし、断えず燃えてゐる火が偶々風に煽られて炎を閃かしたに過ぎない。爰に社会から虐待せられつつ育つて来た青年の一人と交わる人があるとする。其人の生活は決して平穩ではあるまい。さう云ふ青年が寄り合つ

て出来た集団の中央に、幾年の久しい間身を置いて、その一人一人に人間としての醒覚を与えようとしてゐるH君の生活は、実に驚くべきものではないか。己の感動したのは、H君の此日常生活を思つて感動したのである。》

もちろん、「男爵に聞いた物語めいた事実」とは、上に引いた逸話を指すわけだが、秀磨に感動をもたらしたのは、事件そのものではない。Aの事件は一つの現れに過ぎない。彼が感動するのは、そういう事件への可能性を無限に内包しながら送られるHの「日常生活」である。Aの事件で現れたHとその細君の「昔の献身者に似た」生き様が、その日常生活を支えていることに彼は感動したのである。彼等の生は、「其人に睨まれたくないと云ふ情」を内部に感じながら、「顕要の地位に居る人」を見送る秀磨のありようとは、対極的な場所にある。H夫妻のありようは、他者の思惑に一切左右されず、自ら信じる生き方を貫くそれである。そういう人物への賞賛が、Hを見送ることが秀磨にとって「意義のある出来事」と呼ばしめた中身である。

《企てた著述に手を著けないで、本ばかり読んでゐる秀磨が、「己も著述家にならうと思つてゐて見れば、いつかこんな人(H)の生活を書いて見たい」と言う。「興津弥五右衛門の遺書」や「阿部一族」で描いて見せた人物達は、表面的な現象として言えば、Hとは大きく異なるが、自らの信じる途をひた走りに走ろうとする生のかたちという点では、同質である。秀磨の希望は、実は一足先に鷗外自身によつて既に実現され、その世界へ鷗外は歩み始めていたのである。

[注]

(1) 小堀桂一郎『森鷗外—文業改題(創作篇)—』(昭57・1、岩波書店)

(2) 尾形仿『森鷗外の歴史小説 資料と方法』（昭和54・12、筑摩書房）に、典拠である『翁草』（杜口神沢貞幹著）の巻六「当代奇覧拔萃」の「細川家の香木」についての解説とともに、その全文の紹介があり、それとの精密な比較考証の上で、作品論を展開している。「翁草」の引用は、同書に拠った。

(3) 注(2)の同書

(4) 注(2)の同書